



サ ラ ナ



No.22 長寿寺報 令和2年9月

梅田墓のニュースを見て思ったこと

今年のお盆は私の体調が優れないことで皆さんのお宅にお参りすることが出来ず、大変ご迷惑をお掛けしました。一時期は息苦しさや目眩、気分の悪さなど様々な症状が表れて、一日の大半を横になって過ごす状態だったのですが、積極的に休養することで少しずつ良くなってきており、掃除や読書も出来るようになってきました。自律神経失調症は完治することの難しいものだから長い付き合いになりそうですが体調と向き合いながら、ぼちぼちやっていきたいと思っています。

さて、先日、パソコンでネットニュースを眺めていると、JR大阪駅近くで江戸期から明治期の1500体を超える埋葬人骨が発掘されたという記事が目にとまりました。発掘された場所は当時の大阪で流行した「七墓巡り」に名前が挙げられる「梅田墓」があった所で近松門左衛門の「曾根崎心中」にも登場する代表的な墓地でありました。現在は再開発地区となっており、昨年九月から発掘調査が行われてきました。お墓は副葬品が多くないことから庶民のものと思われ、人骨は膝を折り曲げた屈葬の状態、浅い穴に埋められたり、土をかけられたりしただけの状態のものや、7・8体をまとめて埋葬した穴もあり、江戸期、明治期のお墓の様子が解明されることが期待されます。

今日のお墓は、「〇〇家先祖代々之墓」と刻まれるように一世代限りのお墓ではなく、先祖代々、数世代に受け継がれるお墓になっており、これを「家墓」と呼びます。多くの方はこのような家墓はずっと昔から続いてきたものだと思われていると思いますが、実際にはこのような形態のお墓は近代以降のもので、小値賀にある家墓を見ても、その多くが明治以降の新しいものです。では、それまではどうだったかと言うと、地域や身分にもよって異なってくるので一概には言えませんが、概ね江戸期末までの庶民のお墓は記事にあるような穴に埋められるだけのものであつたり、良くて簡易な墓標を建てられるようなものに過ぎず、一世代限りのお墓と言えるものだったと考えられています。それが明治

以降、今日のような家墓に変わってきたのは庶民の暮らしが経済的に安定してきたことに加えて家意識が強まってきたことに由来します。庶民の名字や家紋の定着も同じ時期です。つまり、これまでは生きていくことに精一杯であった庶民の意識が生活の安定により、その先の家の維持、子孫の繁栄へと向いたということです。それゆえ、お墓はその家の隆盛を表しました。

今日においては、核家族化により家意識も随分と薄くなっており、少子化の影響でお墓や家の後継者の居ない家庭も多くあります。一昔前のように養子を取って家を存続させることも少なくなってきたことを見ても、価値観が変わってきたことが伺えます。それは仕方のないことであり、そのことに後ろめたさを感じる必要もありません。ただ、今の自分たちを肯定するために先人たちの家意識や営みの顕れである家墓を古い価値観として切り捨てることは控えたいと思います。今の私たちの価値観が尊重されるように、先人たちの価値観も認めるべきで、価値観を塗り替えるのではなく、積み重ねるような歩みがこれからは必要なのではないのでしょうか。そんなことを梅田墓のニュースから思いました。

ご案内

彼岸会法要

新型コロナウイルス感染対策として、三密を避けるため上記の日程の通り三日間に分けてお勤め致します。檀徒の皆さんに於かれましてはそれぞれが属している地区のお勤めの時間をご確認頂き、該当の日時にご参拝頂きますようお願いいたします。

◆日時

9月19日 午後1時 相津・木場・唐見崎・納島

9月22日 午後1時 笛吹西2班・笛吹西1班・笛吹北・筒井浦・後目

9月25日 午後1時 柳・小浜町・笛吹南・笛吹東・黒島・中村松香丘

◆用意 御仏前・塔婆供養料・霊供膳料

ご参拝の際はマスク着用の上、水分補給のための飲料水を各自ご持参下さい。

釈迦の 生

～episode1～



前回のおさらい

今回は、インド人とヨーロッパ人は「インド・ヨーロッパ語族」という共通の先祖を持つことに加え、インドは生まれ変わり死に変わりを繰り返す輪廻やカーストという厳格な身分制度が存在し、お釈迦様はそのような世界で王族の子(王子)として生まれた方だとお話しました。なお、ここからは悟る前のお釈迦様を本名の「シッダッタさん」、悟った後のお釈迦様を「ブッダ」と区別して呼んでいきます。それでは、いよいよ、仏伝を見ていきましょう。

王子(シッダッタ)の受胎

ある満月の夜、シッダッタさんの母となるマーヤー妃が寝ていると、白い象が現れて、自らの右脇から胎内に入る夢を見ます。インドにおいて白象が夢に現れることは吉兆とされており、シッダッタさんの生誕を祝う「降誕会(花まつり)」の稚児行列などで白象が使われるのはここからきています。夢の話聞いたシッダッタさんの父となるスッドーダナ王は宗教者たちを呼んで夢の意味を尋ねることにしました。すると、妃が王子(シッダッタさん)を受胎したことを告げられ、更に、「王子が在俗生活を送るならインドを統一するような偉大な王となり、出家するならブッダとなるでしょう。」と予言されます。スッドーダナ王にとって、前半の予言は素晴らしいものでした。当時のインドは十六大国と呼ばれた国家がひしめき合っていました。スッドーダナ王率いる釈迦族は大国の一つであったコーサラ国の属国に過ぎませんでした。しかし、息子の代になれば十六大国を束ねるような王になると言われたのですから、それは嬉しいものだったでしょう。それだけに、後半の予言は絶対に避けたいものであったはず。日本仏教の場合は、僧侶も妻帯しますので、「出家してお坊さんになった上で国王になればいいではないか。」と思われる方もいらっしゃるかもしれませんが、本来的に出家は家を捨てるという行為であり、王でありながら

僧侶であることはあり得ません。出家をするということは王位を捨てることを意味したのです。だからこそ、スッドーダナ王はシッダッタさんが出家しないように様々な策を弄すこととなりますが、これは次回以降にお話するかと思います。また、これは補足ですが、スッドーダナ王は漢訳のお経では「浄飯王」と記されます。字の通り、王の治める地域では稲作が行われ、白米を食していたようです。

臨月になると、マーヤー妃は実家に帰省することになりましたが、その途中で産気づき、ルンビニー園においてサーラ樹(沙羅双樹)の枝に掛まり、立ち往生ならぬ、立ち出産しました。インドでは沙羅双樹はそこかしこに生えていますが、日本では気候の違いから育つ事が出来ません。その代わりに、夏椿を沙羅双樹と呼んでいます。他の仏伝には右脇から出産したという記述も見えますが、これは産道もない右脇から出産するかのような難産であったことを示すものと思われます。マーヤー妃は出産後しばらくして、亡くなったとされ、マーヤー妃の姉妹からシッダッタさんは育てられる事になります。また、インドには、綺麗なものを扱うときは右手(清浄の手)を使い、汚いものを扱うときは左手(不浄の手)を使うという習慣があり、後にブッダ(悟った人を意味する)となるシッダッタさんは勿論、「清浄」なものとして、「右」脇なのでしょう。ちなみに、シッダッタさんが生まれたルンビニーという土地は現在のネパール領に当たるのでシッダッタさんは現在の国籍で言うと、インド人ではなくネパール人となります。その後は南に下り、現在のインド領で仏教を開きましたので、仏教誕生はインドで間違いありません。



今回のまとめ

インドでは白象が夢に現れるのは吉兆

右手は清浄の手、左手は不浄の手

シッダッタさんはネパール人

仏教の誕生はインド